

内側から見た JNTO のイストワール⑤

石井昭夫（元 JNTO 理事、
元立教大学観光学部教授）

国際会議漬けの日々

欧州抱持ち旅行の余韻は封印し、報告書一式を提出して職場に戻りました。任意団代日本コンベンション・ビューローは年明け 1965 年 3 月末をもって解散し、JNTO の部局となることが決まっていたから、残る 4 か月、予定事業の実施に全力を傾けました。

そして、1966（昭和 41）年 4 月 1 日、コンベンション・ビューローは JNTO の一部局として事業を開始し、事業部では国際機関 EATA 事務局の業務がスタートしました。

コンベンション・ビューロー室の発足

新体制では、担当理事が前ニューヨーク事務所長の福永正美氏、室長は大迫辰雄氏、次長格が観光局出身の西川脩さんでした。JNTO の組織となったことは、15 カ所の海外事務所のネットワークを活用してコンベンション誘致活動を行うことを意味します。その結果仕事の量は倍増しました。やるべきことの第一は、宣伝資材の種類と数量の拡大です。任意団体で作成した誘致宣伝用印刷物類の改定版増刷（仏語新版作成を含む）に加え、①大量配布できるリーフレット Let's Meet in Japan の英仏語版の新作、②15 分程度の誘致宣伝用映画 Japan Welcomes Your Convention の作成、③録音解説付き自動送りスライドセット A Japan Has 20 Centuries Of Refinement の作成、④プレゼンテーション用のキットの作成を行い、海外事務

所に配布しました。この仕事は行きがかり上私が担当しましたが、とくに映画（岩波映画社に委託）とスライド（日経映画社に委託）の作成は楽しく、貴重な経験でした。

コンベンション関連の調査研究、国際会議ホスト機関に対するコンサルティング活動は新しいスタッフといっしょに質量ともに拡大して行い、海外事務所を通じてのコンベンション誘致活動は新しい局面として展開しました。

まもなく理解したのは、コンベンション・ビューローの仕事は特定分野に限定したミニ JNTO さながらだということでした。編集部のように宣伝資料を作成し、調査部のように MICE 関連の市場調査等を行い、事業部のように海外事務所を通じて誘致活動を行い、かつ国内のコンベンション受入体制の改善と便宜供与の仕事を独自に行っていたからです。この時期アメリカのインセンティブ旅行が注目され、コンベンションの一環としての誘致が論じられるようになって、さらに活動の幅が広がってきていました。

同年 6 月、ニューヨーク事務所に専任のコンベンション・プロモーション・マネジャー（ジョン・マクドネルさん）を採用しました。アメリカのトマス・クック社に勤務した経験のほか公的観光機関で働いたこともある人でした。彼はすぐに研修のために来日し、国内視察には手分けして添乗し、学んでもらいました。

年度事業報告書「国際観光振興会のあゆみ」1966 年度版は初年度のコンベンション・ビューローの事業を詳細に記述しています。日本で開催される国際会議も外国からの参加者も増大の一途でした

が、われわれの努力というより、多くの国際団体がそろそろ日本で開催しようとする時代になっており、むしろ国内団体が経費の捻出や受入れのノウハウに自信なく逡巡するというのが実情でした。

他方、国際会議に必須の同時通訳をはじめとする言語サービスも社会的に注目され、1965～66年に誕生したサイマル・インターナショナル社、ISS社、JCB社など、ホスト事務局を支える企業が登場し、旅行業界やホテル業界の担当部などを含めて、コンベンション業界といえる環境が誕生していました。

IUOTO 東京総会の開催と国際観光年記念事業の実施

1965年10月、メキシコで開催された第19回IUOTO総会は、次の第20回総会（1967年10月）開催地を東京に決めるとともに、国連に対し1967年を「国際観光年」とする要請を行いました。かくして1967年は「国際観光は平和へのパスポート」Tourism, Passport to Peaceのスローガンを付して国際観光年に指定されました。

国連加盟国はそれぞれ国際観光の促進に資する記念行事を実施することとなり、IUOTO総会開催国でもある日本はこの年を有意義なものにするため、国を挙げて取り組むべく、記念行事の実施とIUOTO総会受入れを目的とする財団法人を設立しました（1966年10月）。財団事務局はJNTO内に置かれ、会長は日商会頭でJNTO会長でもある足立正氏が就任、財団設立には佐藤栄作総理大臣や大橋武夫運輸大臣のメッセージが寄せられ、華々しく発足しました。JNTO

は記念事業実施の中核組織として主管は事業部が担い、各部が協力しました。

その中でコンベンション・ビューローは二大行事のうちIUOTO総会の受入れ業務を担当するとともに、記念行事として後述の「同時通訳者養成講座」を実施することになりました。

IUOTO 総会の準備事務局分室として

IUOTO総会のホスト事務局は正会員である運輸省観光局内に設置され、コンベンション・ビューローは実務を担う分室として協力することになりました。会議場内の事柄には関わらず、外国からの参加者登録から開会式やレセプション、参加者の観光や同伴者プログラムの催行などの付帯行事の実務を担当しました。

1966年10月の財団設立以降、JNTO全体が通常業務にオントップして巨大事業をかかえ、ただでさえ少ない人員ゆえに超多忙な日々となりました。

IUOTO東京総会は1967年10月2日～11日までの10日間、東京プリンスホテルを主会場に開催されました。海外からの参加者は78か国からの政府正会員代表178名、ASTA、PATA、IHAなど観光関連団体24機関（賛助会員）から45名、ECAFF、OECD、ILO、ユネスコなど国際機関からのオブザーバー参加者76名、IUOTO事務局のスタッフをいれて総勢318名、日本からは正会員の運輸省観光局、賛助会員のJNTOや財団JTBの代表らが参加登録をしました。

国際会議の裏方仕事は机上の訓練だけでは想像つかないもので、ハプニングあり戸惑いありで、大いにまごつきましたが、一方で大変楽しい仕事でもありまし

た。協力派遣でいっしょに働いてくれた人たちとのチームワークも抜群で、立派にやり遂げることができました。輸送（JTB/高橋）、同伴者プログラム（JAL/岩井）、IUOTO の本部スタッフとのリエーゾン（近ツ/勝又）などでの活躍を記憶しています。

参加者登録 開催日が迫ってくると、何人かの事務局員は会場のプリンスホテルに泊りこんで準備に当たりました。VIP の出迎えは TIC 羽田の佐久間健治所長がさばいてくれました。次々に到着する参加者の登録やホテルへのアサインメントの作業と、その結果の参加者情報の共有は国際会議の重要事項ですが、この仕事は入社1年目の高奎一郎君が新人とは思えぬ仕事ぶりを見せてくれました。彼は登録事務をほとんど一人でさばいてわれわれを驚かせたのですが、本人は大学時代にヨーロッパに遊学し、帰国してアルバイトで医学関係の国際会議の手伝いをしたことがあったそうです。学者先生は決断が遅いので、アルバイトたちが提案して進めたと言っていました。私は早くからプリンスホテルに泊まり込んでいっしょに作業していたのですが、彼は到着する代表の到着日、宿泊ホテル、同伴者の有無、その他諸々の個別データを表にまとめそれらを頭にいれていて、IUOTO 本部事務局員のあらゆる質問に即答して驚嘆させたのでした。新人の彼が登録班の主力になったのは、2年生の北出明君がコンベンション・ビューローの国際観光年記念行事「同時通訳者養成講座」の主担当になったからでした。こちらも前例のない事業で、西洋語と日本

語の同時通訳養成はコンベンション誘致のかなめでもありました。講座は1967年6月20日から9月20日までの3か月間、赤坂プリンスホテルを会場に週4回18:30~21:00の講習を行いました。募集人員は15名、日英、日仏間だけでなく英仏、英西間の同時通訳もやりました。講師にはジュネーブ大学同時通訳科教授ジャン・エルベール博士を招聘したほか、村松増美、斎藤美津子、国弘正雄、小松達也、三島マリさんら第一線の同時通訳者が協力してくれました。

開会式 私自身は開会式の担当となり、進行を任されました。観光局のカウンターパートは国際業務室の池田淳さんで、皇太子ご夫妻にご臨席いただくためのご説明には二人で東宮御所に上がり、重田侍従という方にプログラムの説明などを申し上げました。開会式でお琴の演奏をしてもらうグループに当日の行動などの説明に伺うなどで駆け回りました。開会式は新築なった国立劇場で行われ、皇太子殿下ご夫妻を主賓に、壇上にはIUOTOのA. オーロー会長、佐藤栄作総理大臣、大橋武夫運輸大臣、足立正財団法人官設機関国際同盟東京総会及び国際観光年記念行事協力会会長などの来賓が列席され、華やかに行われました。進行担当の私は舞台袖の内戦電話で楽屋やVIP控室と連絡を取りながら舞台への登場を誘導したのですが、結果オーライだったとはいえ、予定の進行とは大きくずれてしまい冷や汗をかきました。開会式式典終了後の伝統芸能鑑賞では竹原はんの日本舞踊「雪」と吾妻徳穂の「娘道成寺」が演じられました。開会式のよ

うな大事なイベントの演出は、素人の手作りでなくプロに依頼するのが必須であると自戒しました。

事業部に転属、国際機関担当に

IUOTO 総会が終わり、多種多様な国際観光年記念行事を終えて（立派な実施報告書を刊行）、1968 年 5 月、私は事業部に配属変えになり、渡邊幸雄調査役の下で国際機関担当となりました。この間のおよそ 4 か月間は、業務以外の問題にも多くの時間を割きました。入社以来同期入社の塩沢潔君と進めてきた JNTO 労組結成案が、税関から JNTO に転職してきた佐久間健治さんが加わり、組合結成に前向きな若手も入ってきて、準備がととのってきたからです。労組結成大会をひそかに準備し、IUOTO 総会終了直後の 10 月 14 日に開催しました。委員長は佐久間さんが引き受けくれ、私は広報担当執行委員として機関誌の発行などを担当して慣れない仕事に汗をかきました。組合の結成については別途取り上げたいと思います。

国際機関関連業務

JNTO が直接的に関わっている観光関係国際機関は、独立の事務局を有する EATA のほか、IUOTO（公的観光機関国際同盟・賛助会員）と PATA（太平洋観光協会・政府正会員）と ASTA（アメリカ旅行業者協会・賛助会員）の 3 機関が主なものでした。このうち IUOTO の事業は調査部マターでしたが、PATA は JNTO が正会員で会の運営や事業活動にも直接かかわっていましたから様々な業務がありました。PATA は 1961 年度から国単位の地域支部を制度化し、日本

支部は 1963 年に発足していて、私は日本支部の事業を担当しました。理事会や総会の資料を要約・翻訳し、会員の参加を募って総会での宣伝活動を準備し、日本支部主催の観光セミナーを年数回実施したほか、PATA の月刊誌パシフィック・トラベル・ニュースに毎号記事を送るなどの仕事をしました。

ASTA は旅行と観光のトレードショーがまだ存在しなかったこの時期、PATA と並んで宣伝・商談・業界人接触の大切な機会でした。私が配属された時期は、1970 年の大阪万博を控える絶好の 1969 年の世界大会（9 月 14～19 日）を東京で開催することが正式に決まって（1968 年 4 月）間もない頃でした。ASTA 世界大会は外国からの参加者だけで 3,000 人を超す大型会議です。堀木 JNTO 副会長を会長とし、西尾寿男 JATA 会長を副会長とする受入れ委員会が設置され、広報、渉外、財務、宿泊、輸送、行事、会場、旅行の 8 つの委員会を設けて総力をあげて準備を始めていました。準備事務局は JNTO が引き受け、事務所は TIC 東京の 2 階会議室に置き、前シドニー事務所長の井戸栄さんが事務局長に就任し、旅行業、ホテル業など ASTA 会員企業から派遣された 10 人ほどの事務局員とともに私も行事担当の事務局員として出向し、再び国際会議の渦の中に埋没したのでした。

ASTA でも私は開会式とレセプションを担当したのですが、沢山のホテルに宿泊する数千人もの集団を自在に動かす旅行業の威力に感じ入ったものでした。